

「千都の杜」は「兵どもが夢の跡」—補遺

副会長・藤井正樹

昨年、3回にわたって本誌面を拝借し、中世、ホーキ城と呼ばれた山城が「千都の杜」の拓かれた丘陵南端部に築かれたとする伝承について紹介したところ、何人かの方からご質問をいただいた。私の不明のためお答えできなかったご質問があった一方、拙稿ゆえの言葉足らずに起因すると思われるご質問もあったことから、前回書き残したことを補遺として取り上げてみたい。

まず、ホーキ城の「ホーキ」について、私は「千都の杜」域内の旧字名の1つである法基畑の「法基」を充てて仮名としたが、この語の意味について問われて答えられなかった。「千都の杜」域内の旧字である4、5、6、16各号のさらに古い字名に、二ノ倉・山久保・二ツ塚、清水窪・丸山・五郎坂、石田・明神谷、長久保・法基畑・狐谷があるが、法基畑だけが地名らしからぬ字名である。私は先に「ホーキはまさか箒ではあるまい」と記したが、例えば箒草を栽培した畑を箒畑と称し、その「箒」の当て字として「法基」を用いたかもしれないし、さらに云えば、畑の脇に朴の喬木があったことから朴木畑と称し、その「朴木」に「法基」を当てたのかもしれない、などと思い直している。法基城を巡る攻防戦で坂を(に)戦死者がゴロゴロと転がり、その「ゴロゴロ」が「五郎」に転訛して五郎坂と呼ばれていることからの連想である。

序ながら、急勾配で曲がりくねった五郎坂は、攻め手に難攻を強いたであろうことは想像に難くなく、転がった戦死者は城兵よりも寄せ手が多かったのではあるまいか。また、「転がる」には「回転しつつ進む」と「倒れて横たわる」の2つの意があり、五郎坂の場合の「ゴロゴロ」は坂が急勾配のため回転する様を意味するのだろうと思ったが、戦死者を葬った五郎塚の大きさから、多くの死者が横たわる様を意味していると考えてもおかしくはあるまい。

次は、法基城の城主は誰か、ということである。私は法基城を中世城郭の遺構を伝える沢山城(三輪)の支城だったのではないかと書いたが、これは法基城が沢山城の管理下に置かれて従属したことを意味するものではなく、近郷から徴収した米穀の貯蔵所として機能発揮するために機能本位の本支関係にあったのではないかと考えたのである。沢山城址で出土した大量の焼米が米蔵(倉)の遺構を示すもので、北条氏照(八王子城主)が2月26日付(年不詳ながら小田原城が落城した天正18年<1590>)と推考)で発した軍令状が三輪(沢山城)の城米を江ノ島に搬送するよう命じたものだと考える一方、「千都の杜」の拓かれた丘陵南端部がかつて二ノ倉山と呼ばれたことが同地における旧字名の1つである二ノ倉に格別の意味があったことの傍証だと考えれば、沢山城内の大規模な米蔵(例えば一ノ倉)を補完するための米蔵が能ヶ谷の二ノ倉だったのではあるまいか。また、能ヶ谷に的場(弓術の練習場)、三輪に馬場(馬術の練習場)の旧字名があったのは、ともに交通の要衝を眼下におさめる軍事基地として協調関係にあった傍証なのではないか、と考えるのである。

沢山城主については諸伝あり、『町田市史』によれば、後北条氏に仕えた地侍の市川定友・定勝・定吉が代々居城したと推考されているが(天正18年当時の当主は定吉)、市川氏の知行地は三輪と大蔵である。同時代に能ヶ谷を知行したのは名門小山田氏の信有(永禄8年<1565>歿)・信茂(天正10年歿)兄弟であり、当時、市域の北東から南部を中心とする16カ村(北は黒川から真光寺・広袴・能ヶ谷・金井などを含めて南は鶴間まで)を領有したが、これら小山田領は永禄5年頃には後北条氏の直轄領に組み込まれたと云われている。そうであれば天正18年当時、法基城の経営に携わったのは、後北条氏の直臣かもしれないが、沢山城と同じく在郷有力者だった可能性もあろう。前者の場合は具体的に名指しできないが、後者の場合、後北条氏に臣従して能ヶ谷を領していた神蔵氏が最有力候補として挙がるのではあるまいか。

次に法基城が落城した時期である。前記の軍令状が発せられた天正18年2月26日以降、小田原城が落城する同年7月5日までの間に法基城も落城したものと考えられるが、豊臣軍は西方からのみならず北方から前田利家・上杉景勝らの北越軍、東方からは徳川家康軍が侵攻しており、同年6月23日には後北条氏の最大の支城であった八王子城が北越軍の猛攻のため落城している。『町田市史』によれば、八王子城陥落の前後に町田市域も豊臣方の軍馬に蹂躪されて占領下におかれたとあることから、沢山・法基両城もこの頃に落城したものであろう。さらに想像を逞くすれば、沢山城の米蔵が兵火に遭って焼尽したのも、法基城を巡る攻防戦が五郎坂で展開されたのもこの時のことではあるまいか。

最後は最も基本的な質問で、法基城の在りし日を説く伝承の信憑性についてであるが、確実な文献や物証がない以上、実在は実証できないと云うほかない。三輪には馬場のほか城越・要害など明らかに城郭の遺構と思しき旧字名が伝わっているが、先に挙げた「千都の杜」域内の旧字名にそれらしい字名は見出せない(的場は能ヶ谷2丁目で域外)。実証のための残る手段があるとすれば、「千都の杜」開発前の地勢を分析することで城郭の遺構か否かについてある程度の検証ができるのかもしれないが、私にはその知見がない。この点、識者のご教示を乞うほかないのである。

芭蕉が「夏草や兵どもが夢の跡」と詠んだ時、彼の詩囊には奥州平泉で功名栄華の夢を育んだ義経主従や藤原氏一族の盛衰があったが、法基城の「兵ども」は勇猛な坂東武者と云うより半農半士、兵農未分離な階層の人々であったろう。彼らは就農する傍ら武装して郷村の自衛や軍役の賦課に任じたが、中世の終焉とともに武を棄てて徳川幕府の治政下で帰農生活に入っており、『武蔵国南多摩郡能ヶ谷村誌』(明治21年編)に「天正十八年豊臣氏東征シテ北条氏及関東ノ豪族皆滅亡シ全年八月ヨリ徳川氏ノ所領トナリ代官ヲシテ此地ヲ管理セシム」とみえている。その近世も後期ともなると泰平の夢を貪ってばかりもおられず、能ヶ谷の村人達も柿生駅近くの題目塔(能ヶ谷など武相6カ村が寛政11年<1799>に建立)に「天下泰平五穀成就」、能ヶ谷神社参道の地神塔(文久元年<1861>に建立)に「天下泰平五穀豊饒(穰)」などと刻んでいるが、この願文はそのまま法基城の「兵どもが夢」でもあったのだろう。(続)

